

# 産教連通信

技術教育と家庭科教育のニュースレター

産業教育研究連盟発行  
<http://www.sankyoren.com>

## 目次

□ 2026年は新たな飛躍の年となることを願う	1
□ エッセイ「リタイヤ生活を楽しめるようになるまで」 齋藤英雄	2
□ 連載「産教連と私(2)」 三浦基弘	4
□ 常任委員会報告	16
□ 編集部ならびに事務局から	18

### □ 2026年は新たな飛躍の年となることを願う

午年の2026年がスタートしました。日本では女性の総理大臣が誕生し、株価も上昇傾向です。世界へ目を向ければ、依然としてあちらこちらの国や地域で紛争や戦争が続いている状態です。今年の教育界はどんな様子になるのでしょうか。

現在、中央教育審議会(中教審)に対して文部科学省が諮問した「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」と題する課題について、審議が続けられています。次の学習指導要領の改訂へ向けて、その細部を決めるための議論が進められているわけです。この諮問事項に関しては、今、中教審の各教科等の専門部会等で審議が続いている状況のようです。

こうした点を念頭に、今年の全国研究会(第75次技術教育・家庭科教育全国研究会)では、学習指導要領の改訂についての情報交換を受け、全体討議を始めることを考えています。

さて、今年も、産教連の活動は産教連通信の発行と全国研究会の開催という二つの活動を軸に進めます。



昨年(2025年)の全国研究会の様子

# リタイヤ生活を楽しめるようになるまで

元外資系石油会社広報部

齋藤英雄

私は、今71歳。会社を退職してから7年が経過した。現在は、「今が人生で一番幸せな時期かもしれない」と感じている。しかし、退職してからこうした心境に至るまでには、大きな困難を乗り越える必要があった。その経験を語ろうと思う。

## …1 予期せぬ退職

退職前は、外資系石油企業で広報の仕事をしていた。毎日会社に行くのが楽しく、70歳までは仕事を続けるつもりであった。しかし、62歳のとき、勤務先の会社がライバル会社と合併し、60歳を過ぎた私にはまともな仕事は回ってこない。不本意ながらも、64歳で会社を退職することとなった。

予期せぬ退職は、2つの大きな不安をもたらした。70歳まで仕事をするつもりだったので、大した貯金がない。激減する収入に対応できるかが、不安の一つ目。二つ目は、仕事に代わる生きがいをどうやって見つけるかということだった。

## …2 とりあえず退職後に試みたこと

まず、経済的な不安への対応として、再就職を試みた。しかし、心身ともに調子が悪く、雇ってくれる会社はない。ハローワークに行ったが、やりたい仕事は見つからない。そこで、転職サイトに登録したところ、同窓の転職コンサルタントから「その歳では好条件の転職は無理」と言われた。仕方がないので、徹底的な節約を試みる。好きなこともやめて、気持ちはさらに落ち込んでいった。

生きがいに関しては、趣味のサイクリングや水泳をやってみたものの、あまり楽しくない。旅に出るには、先立つものがない。こうして、退職後の2年間くらいは体調も悪く、暗い日々を過ごすこととなった。

## …3 復調の兆し

退職して2年もすると、収入・支出ともに安定してくる。きちっと支出を管理することで、自由に使えるおカネがどれくらいあるかが把握できるようになった。公的年金に加え、企業年金の収入があることも、不安の解消につながっていた。金銭面での不安がなくなると、体調も良くなり、さ

まざまな活動に首を突っ込むようになって、ご近所に人的ネットワークが広がるようになった。その方法を以下でご紹介しよう。



写真1 ダンスの競技会で踊る筆者

## …4 地域での人的ネットワークを築く方法

### (1) マンションのクラブ活動

私の住んでいるマンションでは、シニアクラブというものがあり、15ほどの同好会が活動している。まずは、少しでも関心のあるところに顔を出してみることにした。現在では、社交ダンス、英会話、歩く会に所属している。中でも、社交ダンスクラブでは、ダンスを教える立場となり、代表も務めて

いる(写真1)。大学時代に競技ダンス部に所属したことが、今になって役に立っている。

## (2) 自治体が募集しているボランティア活動

自治体が発行している広報誌を見ると、さまざまなボランティア活動が紹介されている。まずは、小学生の宿題を手助けする「寺子屋」の先生になった。

こうしたボランティア活動を始めると、自治体職員とのつながりも生まれる。「齋藤さん、こういうボランティア活動もありますか？」という声がかかってくるようになる。そうした経緯で、地元に住む外国人市民に日本語を教える「識字学級」のボランティアも始めるようになった(写真2)。これまでの



写真2「識字学級」の盆踊り大会  
(学習者に浴衣を提供)

の海外での生活経験が生かせるので、自分には大変合っている活動だと感じる。

## (3) 趣味の追求

中学校ではブラスバンドに所属していた。担当する楽器はホルンであったが、主旋律を奏でる機会は少ない。主旋律を吹けるフルートが憧れの楽器であった。

そうした潜在的な願望を実現できる機会が訪れた。同じマンションに音楽大学でフルートを専攻した先生がいることがわかった。個人レッスンを受け、さらには、この先生の主宰するフルートアンサンブルへも参加することとなった(写真3)。



写真3 発表会で演奏する筆者

## …5 退職後の幸せとは何か

学生時代は勉強に追われ、そして会社員時代は仕事に追われた。現在は会社に行く必要はなく、親の介護も終わり、今ほど自由を感じることはこれまでなかった。でも、これだけでは本当の幸せを感じることはできない。

まず大切なのは健康である。歳のとり方には人によって大きな差があるが、身体を動かす習慣を持っているかどうかはその差につながるように思う。私の場合、ダンス、サイクリング、水泳、ウォーキングのいずれかを毎日欠かさず行うようにしている。身体を動かす趣味を持つことは健康を維持するうえで極めて重要だ。

次に経済力である。生活に困窮するような状態においては、いつもおカネのことが気になる。新しいことを始めようとしても、おカネが制約になってしまう。一方、生活に必要な最低限のおカネに加え、多少のゆとりがあると、自由度が広がる。しかし、それ以上の富は、幸福感を高めることにつながるとは限らない。

健康と経済力という2つの基盤を満たしたうえで、退職後の幸福感を左右するのは何か？それについて、私は、人とのつながりだと感じる。退職すると失われる会社の人脈。それに代わる地域との人脈が作れるかどうか重要となる。会社員生活とは違い、自分で一歩前に踏み出さなければ、何も起こらない。地域との人脈を築くうえで、私が試した方法がご参考になれば幸いである。



あった。

常任委員会で、広告がよくとれたとほめられたが、自分としては、岩波書店だけとれなかったのが悔しかった。筑摩書房がこの年の7月に倒産したので、宣伝課長のAさんに悪いことをしたと思った。しばらくして、Aさんから私信が届いた。「再建をしているところです。厚かましいお願いですが、広告に出させていただいた『技術の歴史』の本を、割引きをするので、知り合いの方に勧めていただけないでしょうか」という内容であった。この本は名著であるので、快く承諾した。ワンセット14巻で、二十数名の注文をとった。

今では400、500号など、節目、節目に岩波書店の広告が掲載されているが、広告をいただくのに5年を要した。そして、宣伝部のSさんから、出版界のことを多く教えていただいた。とりわけ、平凡社は印象に残っている。当時の社屋が洒落ていて、百科事典というのは儲かるものだと改めて思った。

2011年12月号で休刊になったが、広告は殆ど筆者がとってきたものである。最終号の表2はキトウと合同出版、表3は東京堂出版、表4は岩波書店の広告で飾った。特に岩波書店は社の方針として、初号と最終号に関して、出稿しないことになっているそうである。それを曲げて出稿していただいたので、ありがたいことだと思っている。

## ■ 『物理の学校』の思い出

東京図書に広告を取りにいったら、当時、誌に連載していた「力学よもやま話」が編集部員の眼に止まり、うちから出さないかと言われた。単独で本を上梓するのは初めてなので、とても興奮した。本のタイトルは、『物理の学校』ではどうかと相談を受けた。オストワルドの世界的に有名な『化学の学校』があるので、内心躊躇したが、「将来、世界の三浦になってください」とおだてられた。

「本の帯に著者紹介をしてくれそうな方がおりますか」と言われ、当時、一般の人が知っているような著名人とあまりお付き合いがなかったので困った。ところが、一人浮かんだ。その方は加古里子さんだった。加古さんは、快く「さわやかな手離せない魅力」という惹句で表紙を飾ってくださった。初版は1979年10月であった。「出版社としてももちろん宣伝しますが、三浦さんもお願ひします」と言われた。とくに新聞社がいいと言う。毎日新聞社のあるイベントで応援したことが頭にあったので、厚かましく書評のお願いをしたら、掲載してくれた。一年で4刷になり、出版社も喜んだ。

1981年1月、NHK から出演の依頼があった。「『物理の学校』の本を読んで、こういうユニークな物理の教育番組を制作したい」と言う。筆者は内心嬉しかったが、「専門は物理でなく土木で、顔がまずいし、しゃべり方に自信がないんです」とお断りを申し上げたが、日をおいて粘り強く依頼があったので、校長と相談した。誰にでもできることではないから頑張ってみては、と激励された。

4月から1年間「高校生の科学物理」の番組に出演した。その後、「力学実験」「エネルギーの科学」「技術教室」の番組に、2年間関わらせていただいた。尊敬する先生も NHK 教育番組の初代講師だったので、アドバイスをいただいた。制約もあると思うが、三

浦しかできないことを番組で紹介することが大切と言われた。そのひとつが、高いところから重さの違う2個の物体を同時に落したら、本当に同時に着くかという実験で、いわゆるガリレオの実験である。局としてもはじめての試みと言う。

ヘリコプターで100メートルの高さから2.8kgの鉄球と6.8kgのボーリングの玉を落下させる。しかし、この実験は難航した。飛行物体から物を落とすのは危険なので、運輸省など関係当局と折衝した。結局、千葉県ひとけの人気のないある宅地造成地で行ったが、玉は同時に着かなかったのでおもしろかった。このことを含め、番組のことは、当時連載中の「力学よもやま話」に反映させた。

「振動と共振」の番組で、楠木正成の釣鐘のエピソードにならい、釣鐘を指1本で動かす番組を制作したいと思い、提案してみた。早速、筆者は鎌倉の建長寺に電話をしたところ、「釣鐘は鳴らすもので、揺らすものではない」と断られた。ほかの寺にも同じ理由で断られたが、思いがけず筆者の地元の東久留米市にある浄牧院の住職がNHK技術研究所に勤務していたこともあり、快諾してくれた。人差し指1本で、ブランコのように揺らし、10秒も経たないうちにかなり揺れ、番組が好評だった。

## ■ 技術・家庭科教員の教育現場の実情を知る

機関誌のおもな内容は、技術・家庭科教育の実践記録の紹介だった。編集部の仕事をするまで、産教連の4回の全国大会に参加して感じたことは、特に技術科の教員は、生徒に教える分野が多くて大変だと思った。「木工」「金工」「電気」「機械」「栽培」の分野を教えなければならないことである。参加者の学歴は、国立大学教育学部卒が少なく、私学は工学部卒が多かった。なかには、商学部卒の方がいらした。職業科から技術科にかわったときに、転科したとのことだった。家庭科教員も「布加工」「食物」「家庭教育」など、教案作りの大変さもわかった。思えば、筆者が中学校時代に教わった教科は、技術科でなく職業科であった。

元常任委員の平野幸司さんは、商学部出身であった。その平野さんの弁によると、「技術科の教員は教える分野が多いので、全国大会には、今年は「木工」、来年は「機械」、その次は「電気」の分科会に出席する仲間が少なくないですよ」とのことだった。分野のなかで、大会では「金属加工」のレポートが少なかった。

## ■ 編集内容と誌面の改革

先に述べたように、筆者が編集部に入ったのは1978年4月号からである。つまり、国土社から民衆社に代ったときである。そして、誌名を「技術教育」から「技術教室」に変えたのは1978年7月号からである。「技術教育」の商標の権利をもつ輩から買ってほしいと言われたからである<sup>1)</sup>。

判型は、創刊号(1949年4月)～122号(1962年9月)まではA5判、123号(1962年10月)～311号(1978年5月)まではB5判、312号(1978年6月)～713号(2011年12月)まではA5判である。

毎月の巻頭文ではないが、234号(1972年1月号)より、「子どもの目・教師の目」が

始まっている。向山玉雄さんの提案だったと思う。筆者は「今月の言葉」を提案し、1980年4月号(333号)より始まった。後藤豊治さんが最初の執筆者であった。

気になっていたのは、目次の誌面だった。筆者は少なくない出版社編集部との交流があり、雑誌の目次の作成の苦労話を聞いていた。筑摩書房のAさんにお問い合わせすると、快諾してくれた。

そして、目次は1983年4月号(369号)から変えた。どのように変えたのか、1983年3月号(図5、図6)と1983年4月号(図7、図8)を説明する。Aさんから次の点を指摘された。やくもの(\*、☆など)は使用しないほうがよい。書体はいろいろなものを使うのではなく、シンプルにしたほうがよい。また、〈その他〉おっぺる通信(図6)の〈その他〉は不要である。このように言われた。そして、筆者は脚(下部)に、発行年号と「技術教室」を入れることにした。コピーをしたとき、年号が分かるようにするためである。

## 技術教室 \*\*\* '83. 3月号目次

### 特集/新しい共学の家庭科像を求めて

*「地域」を生かした教材づくり —糸だんご—	藤森 朝美 6
*3年間を通しての共学による食物学習のとりくみ	中嶋 啓子 12
*「生活訓練」としての食物学習 —お好み焼き— —肢体不自由児養護学校での実践—	松本 洋子・伊藤 孝敏・小西 正人 16
*布加工の中に“結び”の実習を取り入れてみて —マクラメの教育的意義と家庭科—	福井 庸子 21
*被服1を男女共学で —帽子づくりの実践から家庭科を考える—	長谷川圭子 25
*心との交流が深まる織物と染色 —都立八王子工業高等学校・織機学科をたずねて—	杉原 博子 34
*先人の衣生活に学ぶ —道具や技術の発達を通して—	及川 理恵 39
*藍の栽培にいどむ —まずは徳島の「藍の里」から—	保泉 信二 44
〈今月のことば〉 「美しく正確に」から 「速く」へ	高野 政紀 4

図5「技術教室」(1983年3月号)(1)



産業教育研究連盟編集

●論文●

浮き彫りにされた技術教育論の当面の課題  
産業教育研究部 49

職業高校はどのように選べばよいか  
—東京の「高校白書」作りの運動から— 深山 明彦 54

〈連載コーナー〉

〈幼児・小学生の工作教育⑧〉 使ってみたい工具 和田 肇 61

〈高校生と技術教育③〉 動身体験学習の実践例(その4) 水越 庸夫 64

〈D・D・Rの総合技術教育の実際②〉 中学校の製図学習 沼口 博 67

☆技術のらくがき(21) J I S名称 高木 義雄 72

☆力学よもやま話(92) りんごごと万有引力 三浦 基弘 80

\*菊づくりを通しての栽培の授業(12)  
—菊の挿し・摘芽・摘蕾— 野原 清志 75

\*農村は明るいか(7) 生きている青春残像 飯田 一男 82

\*民間教育研究連動の発展と産教連⑩  
「主要生産部門」と「技術学」についての他々水享氏との論争 池上 正道 87

〈その他〉 おっぺる通信 白銀 一則 93

教育時評……………71 図書紹介……………95 ほん……………33・38・48・80

図6「技術教室」(1983年3月号)(2)

## 技術教室

JOURNAL OF  
TECHNICAL  
EDUCATION

産業教育研究連盟編集

■1983/4月号 目次■  
■特集■  
男女共学をとり入れた年間指導計画

平和教育に発展した共学の実践 井上芳志 6

男女共学に下駄づくりを取り入れた実践  
泉屋和雄 15

班学習により生き生きと取りくむ共学の授業  
共学の電気と保育学習 中村雅人・石田千栄子 22

男女共学の年間指導計画と課題(1) 酒井静子 28

男女共学を父・母・子どもはどう見ている  
父・母・生徒の意見解剖 園崎啓 35

共学実践Q & A 産業教育研究連盟編集部 41

記念講演  
人間発達の科学技術の位置づけについて(2)  
田中昌人 51

図7「技術教室」(1983年4月号)(1)

連載

技術科教育の理論と実践(1) 近藤義美 58

技能と技術と技術学の概念

道具とは(1) 切る(その1) 小川 和田 章 63

食品あれこれ(1) 栄養素の基礎知識 伊藤達郎 67

工作材料散歩(1) 新しい塗装 水越庸夫 72

小学校家庭科の実践(1) いま子どもはどうなっているか 竹来香子 74

力学よもやま話 90 雑の傍の秘密 三浦基弘 82

論文

家庭科教育をどう考えるか(1) 真下弘征 79

教科構造論をめぐって

特別報告

ソビエトの職業技術教育を視察して(2)  
青年の希望を活力し育てる三つの施設 永島利明 84

電気、金工、そして保育 2月定例研究会報告 研究部 88

随筆

わが家の家事労働 忘れられる男たちの自立 大原弥生 91



■今月のことば

先端技術と手作業  
諏訪義英 4

教育時評 71

図書紹介 95

ほん 21・78・81

全国大会のお知らせ 57

coffee break 27

図8「技術教室」(1983年4月号)(2)

編集会議で筆者は、機関誌の内容について、実践記録をベースに充実させながら、啓蒙記事も誌面に紹介することを提案した。賛同されたが、その分野の泰斗に原稿料を払えないし、付き合いがないと言われた。筆者の行動力と人脈？に期待された。

### (a) 各分野の連載が始まる

1979年8月6日～8日、新潟県中頸城郡鵜の浜(現上越市大潟区雁子浜)で開催された第28次全国大会で、大河出版編集部の美濃部孝さんと初めて会った。雑誌を読んで参加されたとのことだった。当時の技術科教員は大河出版の機械の「技能ブックスのシリーズ」をかなり読んでいた。その後、東京の神田神保町の大河出版に伺い、編集部の方と懇談した。すると、高木義雄さんが執筆を快諾された。開隆堂と東京書籍の教科書を渡した。そして、「技術教室」に、金属に関する連載(「技術のらくがき」1981年7月号～1983年3月号 21回)が実現した。

その一部を紹介すると、第3回「金属のさび」に“……金属(板)材料で問題になるのは「さび」です。鋼板は「さびる欠点があるので、塗装することが多い。亜鉛鉄板やぶりき板の厚板や……”と教科書には説明してあります。……金属の「さび」といわれるものは、だいたいにおいて悪いものとみられているのではないのでしょうか。ところで、金属の「さび」というものは科学的、あるいは化学的、技術的にはいったいどのようなものなのでしょうか。それが実は定義はないのです。いや、化学用語としては「さび」というものはないのです。化学的には、金属の表面が空気中の(主として)酸素と化合したもののなのです。ほとんど乾くことのない台所の流しは、今はほとんどがステンレス鋼板です。こんなところに鉄(鋼)板を使ったら、すぐさま赤さびにやられてしまいます。最近の建築はビルも住宅もたいていアルミサッシを使っています。さびないからです。古いビルは鉄(鋼)のサッシを使っていましたが、さびどめの塗装、保守が大変です。……そこで問題になるのは鉄の「さび」です。鉄の「さび」には俗にいう“黒さび”と“赤さび”とがあります。黒さびは化学的には  $Fe_3O_4$  というもので、これは「さび」といっても、よいほうの「さび」です。酸鉄の赤さびは鉄をこんなにボロにできてしまいます”と説明している。

第5回の「鉄と鋼」に“……この鋼という文字は、金へんに“かたい”という意味の岡を合わせたものと、漢和辞典に出ています。世界で有名な日本刀は、写真のようにちがった材料をたたいて一体にしています。中心の部分はやわらかくて、ねばりがあつて、日本刀を折れないようにするもので、心金しんがねと言います。刃の部分はかたくて刃金はがねと言います。鋼を“はがね”と読むのはここからきたものです。確かに“たたいてきたえたもの”ですね。……”と説明している。高木さんには、教科書の記述の問題点にも触れていただき、常任委員には、少なからず好評であった。そんなこともあり、翌年の4月号から以下の4本の連載が始まった。

「道具とは」和田章(大東文化大学)(1983年4月号～1986年 34回)

「食品あれこれ」伊藤達郎(筑波大学)・吉崎繁(筑波大学)・大桃定洋(筑波大学)・佐竹隆頭(筑波大学)・安原佳彦(筑波大学)のリレー連載(1983年4月号～1986年3月号 34回)

「工作材料散歩」水越庸夫(市川工業高校)(1983年4月号～1986年3月号 29回)

「小学校家庭科の実践」竹木香子(新小岩小学校)(1983年4月号～1984年3月号 9回)

印象に残った執筆者を紹介する。当時、民衆社の前の道路の向かいには、日刊工業新聞社の社屋があった。この会社では、新聞のほかに書籍、雑誌などを発行していた。その中に月刊雑誌「トリガー」という最新技術情報誌があった。編集部と粘り強く交渉し、少なくとも2年間の連載をお願いし、「先端技術最前線」として編集部員によるリレー連載(1984年4月号～1992年7月号 100回)が始まった。評判がよく、100回になり、引き続いて「新先端技術最前線」(1992年8月号～2000年11月号)の連載が始まり、100回続けることができた。計200回、書いていただいたことになる。

「トリガー」編集長のMさんには、退職されて森川圭のペンネームで「発明交叉点」(1999年1月号～2011年12月号 57回)を書いていただいた。

### (b) 各分野の連載から書籍になる

雑誌を出している出版社は、連載が終わると、読者に関心と意義があると判断したものは書籍にすることが少なくない。筆者が紹介したものと連載した著者が自分で出版社と交渉して書籍(写真1)になったものも紹介する。

飯田一男さんの「職人探訪」(1978年8月号～1982年5月)は、向山玉雄さんがお願いしたものだが、筆者が出版社に交渉して『技 手づくり一筋』(飯田一男著 東京図書 1981年)が実現した。

善本知孝(東京大学農学部教授)さんは、筆者が『木のはなし』(善本知孝著 大月書店 1983年)に関心を持ち、「森の科学」(1987年8月号～1990年4月号 33回)の連載をお願いした。連載終了後、筆者が出版社と交渉し『森はレモンの香り』(善本知孝著 文一総合出版 1990年4月)が上梓された。引き続き、著者の希望もあり、連載をお願いし「きのこは木の子」(1990年5月号～1993年4月号 36回)を書いていただいた。

今井敬潤(大阪府立農芸高等学校)さんには「くだもの・やさいと文化」(1993年9月号～1997年10月号 50回)を書いていただいた。その後、この連載をもとにして『くだもの・やさいの文化誌』(今井敬潤著 文理閣 2006年9月)を上梓された。今井さんは特に柿に造詣が深く、柿の論文をまとめて博士号を取得している。法政大学出版の「ものと人間の文化史」シリーズに『柿渋』(2003年)、『柿』(2021年)を書かれている。

技術教育研究会(技教研)の原正敏さんから『現代の技術・職業教育』(原正敏著 大月書店 1987年)のゲラを見てほしいと言われたことがあり、編集担当者がSさんであった。その後、Sさんに、もりひろしのペンネームで「泡を探る」(1990年5月号～1991年12月号 20回)を書いていただいた。連載終了後、筆者は出版社と交渉し、『この世はすべて泡だらけ もうひとつのバブル・ストーリー』(もりひろし著 TOTO 出版 1993



写真1 連載からできた書籍の一部

年5月)を出していただいた。

日本技術史教育学会で知己を得た藤村哲夫(中部大学工学部教授)さんに「電気の歴史アラカルト」の連載(1998年1月号～2000年12月号 36回)を書いていただいた。終了後の2001年(平成13)年1月22日付けで、次のような手紙をいただいた。(抜粋)

拝啓

新年を迎え本格的な冬の寒さになりました。……電気技術史の専門家でない小生が、引き受けるのが許されるかどうか迷いましたが、「頼まれたら断らない」という生活信条と「何とかなるだろう」という生来のいい加減さでお引き受けした次第です。終ってみると、私自身の勉強にもなってたいへんよかったと思っています。……さて、或る人から、講談社の「ブルーバックス」の出版部に紹介頂き、コピーを届けました。ブルーバックスでは、「現在の科学、技術」を分かりやすく民衆に伝えることを主眼としていて、技術史の本は売れないので取り上げていないとのこと。現実に出版リストを見ますと、六百数十種の既刊の中で、技術の歴史を取り上げたものは一冊もありません。

担当者からは「電気の発明小辞典」という形にしたいという申し出がありました。小生は「辞典のような知識の切り売りは困る。ギリシャ時代の静電気の発見から今日の大電気時代を迎えるまでに、先人が何を考え、何をしてきたかを若者に伝えたい。その主旨に合わない出版は断る」と拒否しました。担当者は、私のその主旨を活かして何とか出版したいということで、去る1月16日の編集委員会にかけて、一応、了承されたとのこと。……このようなことで、ブルーバックスからの出版の可能性は目下、五分五分と思います。駄目なら、幾つかの電気関係の教科書出版社に話を持ち込むつもりです。

ただ、「技術史の本は売れない」という意識が出版界にあるとすれば残念なことです。今回の著述に当たって多くの電気技術史の著書を読みましたが、このことが領けるように思いました。これは、私たち技術史を扱う者にとって大きな責任があるように思います。…… 敬具

その後、連載を元にまとめた『電気発見物語』(藤村哲夫著 ブルーバックス 講談社 2002年4月)が上梓された。

もうひとり、日本技術史教育学会で知り合った三輪修三(青山学院大学工学部教授)さんに「機械工学の歴史をたどる」(1999年1月号～2001年12月号 36回)を書いていただいた。筆者も工学の歴史に関心があり、資料で応援させていただいた。その後、著者が連載の原稿を元にして『工学の歴史 機械工学中心に』(三輪修三著 ちくま学芸文庫 筑摩書房 2012年)を出版した。

家庭科の分野で連載に取り組んだひとつは、「食物」で、連載をお願いした方は、黒岩比佐子(1958～2011)さんである。『『食道楽』の人 村井弦斎』(黒岩比佐子著 岩波書店 2004年)を読み、岩波書店編集部の担当者に連絡したうえで、黒岩さんと連絡を取った。予め稿料が安いので、連載が終わったら、農文協から書籍を出す条件でお願いすることができた。そして、「明治の“食育小説”を読む」(2006年1月号～2007年12月号 24回)の連載ができた。連載の内容は、村井弦斎の著作をもとに、「食育」の話題を展開していただいた。『<sup>くいでんらく</sup>食道楽』(1903(明治36))はベストセラーになっており、当時の尾崎

紅葉、幸田露伴、森鷗外、夏目漱石などの作品よりも幅広く、愛読されたという。幸田露伴の作品に『珍饌會』(明治37年)がある。これは、露伴が弦斎の『食道楽』を皮肉って書いたものだと、黒岩さんから教わった<sup>2)</sup>。連載終了後、黒岩さんは連載を加筆・補筆して、農文協からではなく、文藝春秋社から『食育のススメ』(黒岩比佐子著 文藝春秋 2007年12月)として上梓した。

後藤辰夫さんには、「ごとうたつお」の名で漫画「すくらっぷ」(1987年4月号～1997年7月号 100回)、引き続き「でータイム」(1997年8月号～2006年2月号 100回)、そして「スクールライフ」(2006年3月号～2011年12月号 70回)を雑誌が休刊になるまで描いていただいた。後藤さんから、何とか本にできないかとの相談があり、筆者は出版社と交渉し、『すくらっぷ』(ごとうたつお著 大河書房 2005年5月)を出版した。この著の扉に「この本を25年間連れ添った亡き妻澄江に捧げる」の献辞があり、そして「あとがき」に「……私の知る限り家内は、作品を生涯2つしか描いていないのですが、その2つを載せました。……」と記してある。

### (c) 自主テキストについて

産教連の研究成果のひとつとして、自主テキストの発行がある。12冊発行している。

自主テキスト(産教連編) 全12冊

機械の学習(1)(1970年)

《男女共通》電気の学習(1)(1971年)

食物の学習(1972年)

《男女共通》製図の学習(1973年)

技術史の学習(1973年)

《男女共通》加工の学習—木材と金属の加工—(1974年)

《男女共通》電気の学習(2)—電波・トランジスタ編—(1975年)

《男女共通》布加工の学習(1975年)

栽培の学習(1976年)

《男女共通》自主テキストによる問題例集(1976年)

学習ノート 電気の学習(1)(1981年)

学習ノート 食物の学習(1982年)

註：「電気の学習(1)」は、出版後、一部が改定され、初版本と改訂再版本の2種類がある。また、自主テキストによる問題例集は、産教連東京サークル編となっている。

筆者は自主テキストに関わっていないが、「楽しい手作り教室」シリーズに「技術史の学習」(1973年)を加えることになった。その際、筆者は『技術史の学習』の補筆、加筆を行い、参考文献として生徒用、教員用、図書館用<sup>しる</sup>を記し、紹介した。

## ■ 対談で学んだこと

今まで、機関誌で20人<sup>3)</sup>の方と対談させていただいた。貴重な財産と思っている。経緯は、雑誌に新たな分野が開拓でき、誌面が充実すると思い、提案した。当初は、企業の製品開発のエンジニアと話したかった。まず、使い捨てカイロの発明秘話だった。

しかし、企業秘密があるからと断られた。

最初の対談は、小関智弘さん。使い捨てカイロの話をしたら、「昔から、寒いとき、鉄クズをタオルに入れて塩を振り、これを腰に巻くと暖かいのですよ」と教えてくれた。このことは、雑誌に紹介しなかったが、発明の糸口というのは、意外に身近なところにあるものだとおもしろかった。原稿にするとき、録音したテープを起こすわけだが、聞いてみて驚いた。なにせ、ことば遣いが悪い。対談のおかげでとても勉強になった。対談連載中、読者からいろいろなところに行かれていいですね、と言われた。でも、すべて自腹なんですよ、と言うと、驚いていた。

沖縄でイリオモテヤマネコの発見者の高良鉄夫さんにお会いしたときは、学年旅行の合間であった。お会いする日に高良さんの都合が悪くなり、急遽、前日の夜に変更した。運悪く同僚と飲んでいたので、それでもよろしいですかと断り、ほろよい対談となった。ハブとマンガースの話が愉快だった。

なかでも印象に残っている方は、見坊豪紀さん<sup>4)</sup>。対談するのがお嫌いで、粘り強く交渉し、3回校正するという条件で実現。言語学者なので当然とは思ったが、大変だった。対談の当日、見坊さんは病気で入院中。約束だから新宿のあるホテルまで来ていただいた。「バリカン」のスペリング、『広辞苑』に載っている「吐哺握髮<sup>4)</sup>」の話に関心を寄せられた。私が「見坊さんは、この対談シリーズの真打で、始めるときから決めていたのですよ」と申し上げると、大変喜んでいただいた。この対談がご縁になり、お亡くなりになるまで親しくさせていただいた。

## ■ 編集長を降りるにあたって

1995年3月号(512号)をもって編集長を降りることになった。人生の折り返し点に入り、まだ元気なうちに、やり残していることをしたいので、わがままを許してもらった。以前から長くても500号で降りるつもりでいた。しかし、発行所が変わったこともあり、慰留されていた。

編集に携わって、機関誌が民衆社から農文協に代わる時期がいちばん緊張する時期(2012～2013年)であった。筆者の個人的な理由もふたつあった。ひとつは、スコットランドのフォース橋建設に関わった渡邊嘉一を長年調査、研究をしてきた<sup>5)</sup>。この研究にグラスゴー大学から研究員(research fellow)として招聘があった。もうひとつは、都立大学工学研究科の博士課程の試験であった。もし不合格なら、グラスゴー大学は傷心研究派遣になると思った。ところが、運よく合格し、三つの問題が解決し、人生で最良の2年であった。

農文協からの発行は、1993年4月号(489号)からであった。この号を記念号とし、特別対談を企画した。対談相手は、国語教育実践家の大村はまさん。写真撮影者は民衆社の山崎宏さん。山崎さんのお母さまは府立第八高女の卒業生で、大村さんから教わっている。若かりし女学生の写真をお見せし、「お名前は」「にいやま(新山)です」「じゃ、信子さんね。思い出しましたわ」。筆者が「どうして何十年前の生徒の苗字だけでなく、名前もわかるのですか?」「殆どの生徒の名を覚えていますわ。作文指導も

していますから、苗字がわかれば、当然名前もわかりますわ」のさりげないお答に、次の質問ができなかったことを鮮明に覚えている。

思えば、1978年4月号～2011年12月号。43年間、523冊編集してきたことになる。その間、編集長は、1989年4月号から1995年3月号までの5年間。長いようで、短かった思いである。

繰り返しになるが、雑誌の体裁、内容の提案は少なくない。1983年4月号から目次の体裁を変えたが、筑摩書房のAさんがレイアウトをしてくれた。このとき、「情けは人の為ならず」と思った。その後、岩波書店のSさんも応援してくれた。そして、この号からどのページにもコピーしたときにわかるように雑誌名、年月を入れた。1987年1月号から1年間の背表紙を見るとVになるはずが、うまくいかなかったこともある。

思えば、「力学よもやま話」は、100回。編集後記は、少なくとも70回、そして少なくない小文を書かせていただいた。当時の小池一清常任委員は、いつも「力学よもやま話」から読んで、ある話で夢中になり、電車を乗り越してしまったと言ってくだった。また、編集後記で「インディアン<sup>6)</sup>の教え」(1990年7月号 456号)を紹介したこと<sup>6)</sup>に感銘を受けた読者からの便りもあった。書き手冥利につきることが少なくなく、とても励みになった。それにしても、機関誌の編集に携わり、多くのことを教えていただき、育ててもらった。「技術教室」(1995年3月号 512号)に「愚公、山を移す 編集長を降りるにあたって」の最後の締めとして、次のように書いた。

“好きなことばのひとつに「愚公移山」がある。『列子』「湯問」にある話で、昔、北山恵という人が家の前の山を不便に思い、長い歳月をかけて土を運び、ついに山を崩して移したという。このことから、どんな事でも絶えず努力すれば成功するということにつかう。これには山の神が、自分の代でなく子孫まで託す愚公の遠大な計画に惚れ、実現に応援する。そういう意味で、迂生が「技術教室」に託す気持ちは永遠なのである。長い間、ありがとうございました。”

これでひとまず、結びとしたい。

## <註>

1) 詳しくは「産教連通信」(No. 256 2025年10月)「産教連と私(1)」に紹介。

2) 詳しくは「産教連通信」(No. 253 2025年1月)「夏目漱石の博士号辞退の背景(3)頑なに固辞した理由をなぞっていくと」に紹介。

『珍饌會』の内容はこうである。食通が集まる会で、お互いに料理を出し合って、食べられなかったら負けというもの。しかし、ゲテモノではなくれっきとした料理本にあるものでなければいけないルール。主人公はエスカルゴを出す。現在、この料理は知られているが、明治時代の庶民は殆ど知らなかったという。主人の使用人にカタツムリを取ってこいと命令。しかし、カタツムリは、集まらず、ナメクジならたくさんあるという。でも参加者の食通に食べられてしまう。クライマックスは、密蝨<sup>みつしよく</sup>。中国料理のひとつ。畑に棲んでいるネズミ。生まれたばかりのネズミに蜂蜜をかけて食べる料理。食べると「チュー」というらしい。周りの参加者は、気味が悪く誰も食べ

ない。勇気のある食通の出席者は意を決して箸で食べようとする。口に持ってきたとき、「このネズミは新粉細工ではないか」というオチがついたもの。

この小説は露伴が村井弦斎の所業を皮肉り、当て擦って作ったもの。その後、露伴は『食通放談』（讀賣新聞婦人部編 秋豊園出版部 1935年）に次のように書いている。「…四十年前でさ、食物の話を書いたのは。なァにね、自分で食ったわけぢゃない。食道樂のなんのと大きな面をする奴がゐて腹が立つたから、虫だの蛇だのを食ったと下らねえ自慢話をする連中の様子を書いてみたまでサ。……」。

### 3) 対談者のリスト

小関智弘(旋盤工・作家)「技術教室」(1980年4月号～5月号)

加藤迪(NHK ディレクター)「技術教室」(1980年6月号～7月号)

北濱喜一(河豚料理・研究家)「技術教室」(1980年8月号～9月号)

西尾元充(画像工学研究所)「技術教室」(1980年10月号～11月号)

山口祐造(石橋研究家)「技術教室」(1980年12月号～1981年1月号)

野間聖明(JAL パイロット)「技術教室」(1981年2月号～3月号)

山川静夫(NHK アナウンサー)「技術教室」(1981年4月号～5月号)

山田康雄(木材工芸家)「技術教室」(1981年6月号～7月号)

高良鉄夫(琉球大学教授)「技術教室」(1981年8月号～9月号)

白石奈緒美(俳優・薬缶研究家)「技術教室」(1981年10月号～11月号)

大内延介(将棋棋士)「技術教室」(1981年12月号～1982年1月号)

見坊豪紀(国語学者)「技術教室」(1982年2月号～3月号)

板倉聖宣(科学史家)「技術教室」(1984月号8月号)

平田寛(早稲田大学教授)「技術教室」(1986年1月号)

永山絹枝(童話作家・琉球新報記者)「技術教室」(1987年2月号)

中澤護人(鉄鋼技術史研究者)「技術教室」(1989年2月号)

大村はま(国語研究家)「技術教室」(1993年4月号) (註：この号より農文協に移る)

朝比奈隆(指揮者)「技術教室」(1995年1月号)

加藤美明(「子供の科学」編集長)「技術教室」(1995年4月号) (註：鼎談 飯田朗編集長同席)

小関智弘(旋盤工・作家)「技術教室」(2002年7月号) (註：600号記念)

岩澤信夫(農業技術指導者・不耕起栽培推奨者)「技術教室」(2009年3月号)

### 4) 「吐哺握髮」の対談箇所

**三浦** 六年前、ある先生から「吐哺捉髮」という言葉を教えていただいたんです。知らない言葉はすぐ辞書をひくクセがあるんです。それで、早速『広辞苑』で調べたんです。すると、その言葉がないのです。ウソを教えられたかな(笑い)と思いながら、よく調べてみると、「吐哺握髮(とほあくはつ)」ならあったんです。教えていただいた先生の記憶違いかなど、漢和辞典を調べたら「吐哺捉髮」があり、出典は『史記 魯世家』とありました。「吐哺握髮」もあり、出典は『韓愈』でした。ところが、『広辞苑』の出典は『史記 魯世家』とあったので、最初、漢和辞典のほうが間違っていると思ったんです。握も捉もほぼ同じ意味だけれど、どうして二

通りの言い方があるのだろうかと思いながら別の辞書も調べてみたら、『広辞苑』が間違っているような気がしたんです。天下の『広辞苑』と思いながら、岩波書店に手紙を出したんです。私の指摘が正しければお返事くださいと添え書きしたのですが、なかなかこないんです(笑)。三か月後に、「ご指摘ありがとうございました」と、葉書がきました。

**見坊** ミスを見つけて、たいしたもんですね。辞書が直りましたか？

**三浦** 第二版で指摘しましたから、第二版の補訂版には「吐哺握髮」から「吐哺捉髮」にかわっていて、この項目の最後に「吐哺握髮」も書いてあります。正直行って嬉しかったです。20年近く、誰も指摘しなかったのですからね。

5) 詳しくは「産教連通信」(No. 254 2025年4月)研究報告 技術のこぼれ話「フォース橋と渡邊嘉一」に紹介。

6)「アメリカ・インディアンの教え」

子どもたちは、こうして生き方を学びます。

批判ばかり受けて育った子は 非難ばかりします。

敵意に満ちた中で育った子は だれとでも戦います。

冷やかしを受けて育った子は はにかみ屋になります。

ねたみを受けて育った子は いつも悪いことをしているような気持ちになります。

心が寛大な人々の中で育った子は がまん強くなります。

励ましを受けて育った子は 自信を持ちます。

ほめられて育った子は いつも感謝することを知ります。

公明正大な中で育った子は 正義心を持ちます。

思いやりのある環境で育った子は 信仰心を持ちます。

人に認めてもらえる環境で育った子は 自分を大切にします。

仲間の愛の中で育った子は 世界に愛をみつけます。

三浦基弘訳

Children Learn What They Live

If a child lives with criticism, He learns to condemn.

If a child lives with hostility, He learns to fight.

If a child lives with ridicule, He learn to be shy.

If a child lives with shame, He learns to feel guilty.

If a child lives with tolerance, He learns to be patient.

If a child lives with encouragement, He learns confidence.

If a child lives with praise, He learns to appreciate.

If a child lives with fairness, He learns justice.

If a child lives with security, He learns to have faith.

If a child lives with approval, He learns to like himself.

If a child lives with acceptance and friendship, He learns to find love in the world.

作 Dorothy Law Nolte

## □ 常任委員会が行われました

1月上旬に常任委員会が行われました。この場で話し合われたことの中から、何点かをお知らせします。

\*今年(2026年)の夏の研究会(第75次技術教育・家庭科教育全国研究会)について

- ・ 8月1日(土)午後、2日(日)午前という一泊二日の日程で実施する。
- ・ 場所は昨年と同じ東京都教職員組合北多摩西支部北多摩西教育会館とする。開催案内は6月公開予定。
- ・ 内容は、現在、中教審(中央教育審議会)で審議中の次期学習指導要領についての情報交換およびそれにかかわる授業内容の検討、授業実践に基づく問題提起、これまでの研究活動で生まれた教材の今後への生かし方などを予定しているが、その詳細については検討を進めている段階である。

\*今後の活動とそれにかかわる連盟総会について

- ・ 連盟総会は例年より多くの時間を設定し、その中で今後の活動を含めて討議をする。総会に参加して、対面での討議に加われない会員もいることを考慮し、開催案内送付時に資料を添付して、意見をもらうという手だても考えている。

\*産教連通信について

- ・ 機関誌が市販されていた頃よりも格段に個人情報の扱いに気を配る必要がある時代になっている。加えて、写真の掲載については今まで以上に神経を使って編集する必要があることを確認した。

### 手と道具の効能

最近、身体の衰えを感じる場合があります。具体的には、無意識に手で物をつかんだとき、落とすことがよくあります。仕事でハンマーやペンチを使っていたときにはそのようなことはありませんでした。人は手を使わなくなると、握力が落ちます。

そんなとき、福岡県の足立止さんからの一言に教えられました。足立さんは、朝起きる前、寝床体操をするそうで、身体を大事にしていることがよくわかります。

このことから、子どもたちにも伝えたいことは、「手と道具を使うと、脳も握力も発達するが、使わないと老化して日常生活に支障が出る」ということです。

(岡山・赤木俊雄)

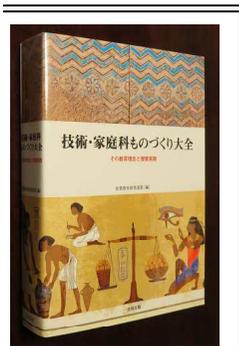
## 「技術教室」「技術教育」全号公開

産教連が編集していた「技術教室」誌が休刊となって(2011年12月号にて休刊)からすでに14年以上が経過しています。この間、新潟大学教育学部の鈴木賢治氏および同学部技術科の学生の尽力により、「技術教室」ならびに「技術教育」の公開版が完成の運びとなっています。技術教育・家庭科教育の実践・研究に大いに役立つものと期待されます。産教連のホームページからアクセスできますので、ぜひご利用ください。  
(編集部)

## 『技術・家庭科ものづくり大全』が刊行されました

2021年8月、産教連編による『技術・家庭科ものづくり大全』が合同出版から刊行されました。70年にわたる産教連の研究と実践の活動の集大成ともいえるべき書籍で、A5判、656ページの大著(定価：本体3000円+税)です。

学校現場で技術教育・家庭科教育に直接携わる教員だけでなく、技術教育・家庭科教育に関する研究者やものづくりに関わりのある多くの方々が本書を手にすることを希望しています。



## メーリングリストの積極的な活用を

今や、インターネットの利用は当たり前です。「最近、図書館でこんな本を見つけました」「こんな情報を耳にしたのですが、もっと詳しいことを教えてください」というようなことを産教連ネットへ載せることで、情報交換の輪が広がります。

産教連ネットに情報を発信することが活用の第一歩となります。この産教連通信でも、産教連ネットへ発信された情報を編集し直し、「会員からの便りを紹介します」というタイトルで、随時、紹介していますので、参考にしてみてください。

産教連ネットへの登録手続きについては、まずは事務局へご連絡ください。連絡先は本号の最終ページに記載されています。  
(編集部)

## □ 編集部ならびに事務局から

産教連通信の執筆要項を産教連のホームページ上で公開しています。この規定に沿って、原稿をお願いします。原稿の送付先は編集部(下記参照)です。会員の皆さんの寄稿を待ち望んでいます。

さて、コロナ禍のなか、2021年夏に開催された連盟総会で、今後の活動規模を縮小することが決まり、実行に移されています。皆さんがご覧になられているこの産教連通信も、それまでの隔月刊(奇数月発行の年6回)から季刊(年4回の発行)に変更になり、5年近くになろうとしています。

ところで、事務局や財政部などから出された郵便物が宛所不明で戻ってきってしまうことがたびたびあります。それが日常の活動に関する重要な文書だったりすると、会員の皆さんにとっては不利益を被ることもあるかと思います。どうぞ、**人事異動や転居などで住所・電話(FAX)番号・勤務先などに変更があった場合には、お手数でも、すみやかに事務局(下記参照)までご連絡をお願いします。また、メールアドレスの変更についても、同様にご連絡くださるとのりありがたいです。**

### 編集後記

今や、コンピュータやインターネット関連の技術のめまぐるしい進歩には目を見張るものがあります。なかでも、最近頼りに注目を集めているものの一つに AI(人工知能)を活用した技術があげられます。編集子などはこうした技術の変化にはついていけないほどです。

AIを上手に活用すれば、生活を便利で意義のあるものにすることができる一方で、この技術が悪用されると私たちの生活が脅かされることにつながります。約4割の小中学生が生成AIを教師の指示なく利用しているということを目にしたこともあります。教師も子どもたちとともにAIの賢い使い方を身につけていくという姿勢が大事なかなと思います。現代を生きる子どもたちが少しでもAIの賢い使い方ができるようにするための方策を今夏の全国研究会で議論できればと思っています。  
(金子政彦)

産教連通信 No.76 (通巻 No.257)

2026年1月20日発行

発行者 産業教育研究連盟

編集部 金子政彦 〒247-0008 神奈川県横浜市栄区本郷台5-19-13  
☎045-895-0241 E-mail mmkaneko@yk.rim.or.jp

事務局 野本恵美子 〒224-0006 神奈川県横浜市都筑区荏田東4-37-21  
☎045-942-0930

財政部 藤木 勝 郵便振替 00120-8-13680 産業教育研究連盟財政部